（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　加藤 喜市

本論文は、『ニコマコス倫理学』（EN）第7巻（＝『エウデモス倫理学』（EE）第6巻）と第10巻における「二つの快楽論」の綿密な比較考究を通して、アリストテレスが「快楽」と「苦痛」をどのように捉え、両概念の倫理学的意義をどこに見い出していたかを明らかにしようとするものである。「序章 方法論」「第一部 快楽論」「第二部 徳論・教育論」「終章 幸福論・観想論・友愛論」の四部から構成されている。

序章は、アリストテレス倫理学の方法論的特徴について、「エンドクサの手法」と「弁証的問答法」という二点から考察する。第一部第１章では、EN第7巻（＝EE第6巻）の快楽論Aを取り上げ、「妨げられない」「自然本性に即した性向の活動」というアリストテレスの快楽概念が「生成過程」とどのような関係にあるのか、Bostock、Aufderheideの論考を手がかりに読み解く。続く第2章では、アリストテレス自身の積極的主張と目されるEN第10巻の快楽論Bに焦点を当て、「健康と医者の比喩」や「華やぎの比喩」について論ずる。そして第3章では、快楽論A・Bの関係を「最高善」との関係という視点から論じ、「衝撃的主張」に関するRappの議論とエウドクソスの議論に関するWarrenの論考との批判的対論がなされる。第一部附論では、A・Bにおける快楽概念の齟齬の問題に対するOwenらの解釈史を瞥見し、さらにJaegerの研究を踏まえて、アリストテレス倫理学を「生きられた思想」として捉える方針が示される.

第二部第4章は、アリストテレスの快楽理論の謂わば「応用編」として、快楽論以外で「快苦」を論じている箇所を取り上げる。考察の対象となるのは、EN第2巻の徳論と第7巻の無抑制論である。ここではBurnyeatの論文「アリストテレスと善き人の学び」で提起された問題を扱い、無抑制論のうちに見られる「後悔」や「内的葛藤」といった論点からアリストテレス倫理学における「苦痛」概念の意義を示す。そして最終第5章では、他者と「共に生きる」という「人間存在」のあり方に考察の眼を向け、快楽が「生きること」を完全にするという快楽論Bの第10巻第4章で語られる〈生の完全化〉の論点を、友愛論における「自己知覚」・「他者知覚」の問題と結びつけることで、アリストテレスの倫理思想における快苦の意義を〈共生の完全化〉の内に見定める。

先行研究に対し論者の立場が必ずしも明確に打ち出されないことは、〈共生の完全化〉をもってアリストテレス快苦論の現代的意義とする思想的結論の説得力の弱さと共に、なお将来の課題として残るとはいえ、本論文は、単独で扱われがちなアリストテレスの快楽論を苦痛論と対比的に論じて、その奥行に光を当て、また目ぼしい先行研究を渉猟した着実な研究である。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに相応しいものと判断する。